使えない一人称は異世界にて

黒崎 達哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
使えない一人称は異世界にて

【Ｎコード】
Ｎ５５３８Ｚ

【作者名】
黒崎　達哉

【あらすじ】
対人恐怖症で、記憶障害で、神様信仰で、父親が武道家な俺、咲野　姫葉が突然降り掛かった大爆発により、少しの知り合いと共に異世界に飛ばされます！！飛ばされた先の世界はファンタジー詰め合わせのロマン世界！？家のしがらみから逃れる事に成功し、開放感ＭＡＸの俺。だが、それは実は仕組まれていた事で……何だか俺が僕じゃない……。
※主人公が神様に願った事が叶う話。だけど神様も万能ではなくて…。

第一話　告ってフられた…

俺はごく普通の高校生。
名前は咲野（さくや）　姫葉（きょう）。

すいません。嘘です。開幕から嘘つきました。はい。真っ赤な嘘です。普通になりたいだけです。まず、名前が女々しいとは思わないでください。結構コンプレックスです。

まず、俺が普通ではない理由ですが…記憶障害。

記憶障害とは、記憶を思い出すことができない、また、新たなことを覚えることができないなどという、記憶に関する障害の総称である。　一時的に思い出すことができない記憶は短期記憶障害、長期間思い出すことができない記憶は長期記憶障害と、二通りに分けられる。

俺の場合、過去の記憶。医者が言うには過去の精神的ストレスが原因で記憶が欠損してるんだと。まあ当てはめると短期記憶障害になる。

いやね？これだけなら俺も全然ＯＫなんだよ？

だけどな…俺はこの記憶障害のせいで……

……対人恐怖症なんだぁぁぁぁア！！

対人恐怖症。聞いた事ぐらいあるだろ？

家族とケンジ（家のバカ犬）に近所の麻希姉は大丈夫なんだよ？
でもな…他人と話そうとするとな…足はガクガク、心臓ドキドキ、焦点グルグル。
もうね…嫌だ。

でもな…俺が普通ではないっていうのは実はこれだけではない…。
ウチの親父…武道家…咲夜流肢牙爪一刀術（しがそういっとうじゅつ）の師範代…って言っても俺に無理やり教え込んでるだけに物凄いタチの悪さだ。
本当ね…毎朝毎朝稽古稽古…毎夜毎夜稽古稽古…毎週土日も稽古稽古……。

ふ　ざ　け　ん　な！！！

俺は高校生だぞ！？青春という甘くほろ苦い一時を謳歌する儚き旅人だぞ！？可愛い子には旅をさせろって先人も言ったじゃねーか！？俺は別に可愛い子じゃねーけどな！！

という訳で告白する事に決めた。
え？いきなりなんだって？死ねって？そ、そこまで言わなくてもいいだろーが！！

告白する理由は簡単簡単。青春を謳歌するのと、俺の虚しすぎる対人恐怖症を克服するためだ！

よし、いざゆかん！！

てかもう学校遅れる！早く行かねば！

。
。
。

教室で一人の女子生徒を見つめていた。その女子生徒は学校で大人気を誇る、倉月　優花その人だ。黒髪の、絶対に和服が似合う清純派美少女だ。あの人に告白しようと思っています。はい。

え？無理だって？んな事してる暇が有ったら、とっとと死ねって？さ、さっきから何お前！？なんか俺を殺したがってない！？ちょっとマジで怖いんですけど！！

…あ～本当に…倉月さんと付き合えたら絶対幸せだろうな～。…よし…思い立ったが吉日だ！！ぜってー彼女にしてやるぜ！

そう考えたらなんだ！？セリフだ！

。
。
。

やばい呼び出してしまった…。放課後屋上に来てって……。

優しくわかった。っていってくれた時の笑顔…ちょう燃えるぜ！！

そして、屋上で一人テンションあげあげの俺の耳に、錆びたドアが開く音がする。そちらに目線を送ると、倉月さんが。

途端に直接心臓を掴まれてる様な感覚。頭が熱くなり、吐き気がこみ上げる。対人恐怖症のありがたい恩恵だ。

だが、それでも歩いて倉月さんの前へと歩いて行く。苦しみに耐える俺…。結構いけるんじゃないか？苦しみが恐怖症だけになんか馬鹿らしいけど。

「く、く、倉月さ、さん。」

くう。やっぱ舌が思った通りに動かない。虚しいものだぜ。

「何？」

だが、倉月さんは気にせず笑顔を向けてくれている。ここで言わずしてなんと言う！

「す、好きです！！ぼ、僕とつ、き、付き合って下さい！！」

言ったーーー！！心臓がバクバク言い過ぎて胸を突き破りそうだ。さぁ！答えは！？

「ごめんなさい…。」

がはっっっ！！！『姫葉に９９９９のダメージ』

な、なんでだ…。

「ごめん…あたし…男らしい人が好きなの……」

ＫＯ！！『姫葉は息絶えた』

俺に背中を向けて走り去って行く倉月さん。

しょ、じょうがないだろ！？俺だって男らしくなりてーよ！！でも無理なんだよ！人が前にいると．、どうしてもああいう風になっちゃうんだよ！

「くそ…」

俺は滲んできた涙の雫を振り払うと、屋上をトボトボと歩いて出て行った。

第二話　スーパーエクスプロージョン

俺は今、自分の部屋のベッドの上で涙を流している。

”男らしい人が好きなの”

その言葉が俺の心を深く抉っては脳でフラッシュバックする。

「ちくしょう……あ～男らしくなりたい…てか、対人恐怖症を治したい…」

俺の悲痛な魂の呟きは部屋の壁に染み込んでは儚く消えた。

「あ、そういや、まだ”アレ”やってなかったな…」

。
。
。

赤くなった目で俺は今家の裏にある祠に来ている。祠にある戸を開けると、中には俺が１２歳の時から一日もおこたわらず見てきた絵画が有った。

天照大神…。

俺はこの神様が１番好きであった。ギリシャ神話や、北欧神話、中国神話など全てを合わせた中で。

天照大神とは、太陽を神格化した神であり、皇室の祖神（皇祖神）

の一柱とされる信仰の対象だ。

「……」

因みに俺は天照皇大神宮教（てんしょうこうたいじんぐうきょう）に属している。まあ、その事も関係あるって事さ。

俺は目を閉じて祈りを捧げる。何を祈ってるかって？別に…対人恐怖症が治ります様にってね。虚しい……。

そのまま五分ほど祠の前で手を合わせて祈っていた。嫌な事があった時にこうしてると気分がよくなるのだ。そして、俺はゆっくりと目を開けた。

今では俺が掃除している祠…。
これだけが俺の自慢できる事だ。

「姫葉！稽古を始めるぞ！」

「はいはい。」

俺は憂鬱感で押し潰されそうになる心をどうにか持ちこたえて、庭にある道場へと向かう。

『願いを叶えてやろう。』

呟く様な小さい声が聞こえた様な気がした。だが、それはとてもじゃないが、全てを聞き取れなかった。

。
。
。

唸りを上げた拳が俺の顔面のすぐ横を通り過ぎる。どうにか首を傾けて回避したが、まだ親父の攻撃は終わらない。拳を繰り出した勢いで体をひねりながら下段蹴り。膝裏に入った蹴りが俺の足を挫く。

蹴りの食らったことでこけそうになるが、俺は手をついて真上にある親父の顔面に蹴りを放つ。

だがその蹴りは容易く掴まれる。いや、その蹴りは囮だ、と言わんばかりに、もう一方の足を高速で振り上げ、かかと落としを脳天に食らわす。

当たった！！

そう思ったが、親父は掴んでいた足を捻って俺の体を崩す事で、蹴りの軌道を曲げた。

クソ、化け物親父が！

。
。
。

「今日はここまでだ。」

俺は道場で一人で蹲ってる。

そりゃそうだ。俺が腹に食らったのは咲夜流奥義。鬼咲剛衝。

咲夜流に伝わる独自の呼吸法で一部だけ、一時的にリミッターを外す技。

俺が食らったのは3ある内のリミッター1。だがそれでも、ガードを突き破って悶絶させる程の威力はもっている。

どうにか反応して咲夜流剛体法を腹に掛けたが、無理でした。痛いものは痛い。

苦しい…。

じっと痛みが和らぐのを待っていた俺の耳に道場のドアを開ける音がした。

「うわ…。」

うわじゃねーよ！

入って来たのは近所の麻希姉だ。茶色い髪をセミロングにしている愛らしいその姿は俺をおちょくるためだけに産まれたに違いない。

「何？芋虫？」

芋虫じゃねーよ！！まあ、ぽいけどさ！

「あ、が、」

腹が痛くて喋れねー！！

「うん。うん。わかった。」

何を分かったんだ！？教えてくれ！いや、教えてください！？

「買い物に付き合ってくれると…。」

違うわ、バカ！！てか、お前の買い物は買い物って言えねーだろ！！いつもいつも、キモいぐらい買いやがって！！ちょっと可愛いからって調子にのんな！？学校で嫌な噂広げるぞ！？いやマジで！？

そう思ってたら、腹を蹴られた。

泣ける……。ってなんでだよ！？

「なんか……ムカついたっていうかね？」

理不尽すぎる……。しかも顔が怖い。

。

。

。

「憂鬱だ…」

俺はまた登校時間になり学校へと向かっている。麻希姉のカバンを持ったまま。

隣を行く麻希姉は俺を奴隷として扱うのに優越感を抱いているのか、なんだか嬉しそう。

「ああ、憂鬱だ…」

俺の目に見える落胆の仕方をみると、肘鉄を脇腹に食らわしてくる麻希姉。

「あんまり一緒にいる時に、憂鬱憂鬱だ、言われると何かムカつくんだけど。てかどうしたの？」

「フられた…」

「は？」

「告ったら…フられた。」

「ああ……なんかドンマイ。」

「慰めてくれんの？」

「社交辞令。」

くそ……

。

。

。

教室で一人窓越しの空を眺めている。倉月さんはいつも通り、品のある笑顔で友達と語り合ってる。そう…いつも通り。

もう嫌だ…死にたい。……ゴメン今のウソ。嫌だ、死にたくない。

そんな何か、逃げ場のない風な感じで、空を眺めていた俺。ぼーっとしたままだったが、その状況は空から降ってくる一筋の光を見て壊された。

「何だあれ……？」

他にもみた奴がいるのか、口々にそんな事を言ってる。

何か嫌な予感…。俺の嫌な予感は大抵当たる。

「うわ！」

一瞬にして半端ではない眩しさが俺の目に入ってくる。

その直後…

大爆発が起きた……。

ドッッガァァァアン！！

その爆発は二キロ先から始まると、ついには校舎を丸々飲み込んだ。

うん。これ死んだね。

第三話　姫から鬼へ

眠い……。気持ちがいい。肌に伝わる爽やかな風が、俺の体全体を包み込んでいる様だ。

俺は寝返りをうつ。そこには、俺の抱き枕があるはずだ。

すると、何故か腕に伝わる感触はとても布ではない柔らかさだった。

ん？何だこれ。なんかムニュムニュしててすげー肌触りがいい。ずっと触ってたいくらいだ。手のひらサイズのプリンの様な…俺はそれをずっと触っていた。

「き、き、きゃぁぁぁ！」

（うお！？何だ何だ！？）

そう思い俺は寝ていた体を起こす。

すると、俺の目の前にいるのは、自分の体を抱きしめている倉月優花さん、その人だった。

何故？

「あ、あの？」

俺が手を伸ばすと、ビクッとなって後ずさる倉月さん。

何だろう？心が痛い。

俺は立ち上がつって辺りを見回して見る。すると、どこかの森の中だという事がわかる。人は俺と倉月さんだけ。

俺が触ったのはもしかして…

いやいや、そんな訳ないじゃないですか。いやいや、ありえません。…よし！本人に聞いてみよう！

「ね、ねえ？」

ビク！

「もしかして僕さ？」

ビクビク！

ＯＫもう…わかった。うん。…話しかける度にビクビクすんだもん。

分かりやす過ぎて、逆にハートが痛い。

「あのさ…ここってどこなんだろうね？」

マジでどこだろう。こんな密林、近所にはないはずだ。あ、でも車で１時間程走らせたとこに山があったな。てか、俺冷静だな。

「え？……あ、あたしも知りません…」

ぐは！？

「倉月さん…わざとじゃないんです。すいません。」

敬語で話しかけられるのがこんなにキツイとは思わなかった。もはや心臓を突き破って地平線の彼方まで飛んでいってしまう程の攻撃力だ。

「え……わざとじゃないの？」

わざとだと思われてたんだ……これで倉月さんの中での俺のイメージが分かるから痛すぎる。

「わ、わざとじゃないで、す。」

何か嘘ついてる様な文面になったが、これは対人恐怖症のせいだ。断じて！わざとではない！……それにしても大きかったな…。

「今失礼な事考えなかった？」

ムスっとした顔で言う倉月さん。可愛いだけにフられた事が虚しい。

「ま、まあ、いいや。と、とりあえず、ほ、他にも人がいないか、僕が見てくるから……その…こ、ここで待ってて…。」

くそ…文章が途切れ途切れだ。伝わってるのかも分からんぐらいだ。

「ありがとう。咲野くん…でも、やっぱりあたしも行く。」

「あ……う、うん。」

。
。
。
それにしても……他に人はいなそうだな…。俺と倉月さんは並んで２０分程近辺を探したが、どこにも人の姿はなかった。
「？咲野くん？その手どうしたの？」
倉月さんが俺の手を指差しながら言う。そこで俺は初めて手の違和感に気がついた。
「？」
俺の手の甲には姫、という漢字が大きく彫った様にあった。
「な、何だよこれ…？」
「……怖いよ…」
俺は倉月さんの言葉にえ？と顔を見てしまった。
「な、何なのここは…！？怖い…家に帰りたいよぉ。」
そう言って涙を流す倉月さん。その体は縮こまって細かに震えており、小動物の様なイメージだ。守ってあげたい！！そう思った。
そして、俺はその震える背中をずっとさすっていた。
。

。
。
夜になった。ここで親父の教えが人生において初めて役に立った。因みにそれはサバイバル能力。
「い、一応何か食べとかないと…い、いけないから。な、何か動物がいれば、いいんだ、けど。」
倉月さんはつけた火の前で体育座りをしている。目が赤くて何だか見ていられない。
俺はどうなのだろうか？こんなとこにいきなり連れてこられて……何故パニックにならないんだろう。
いや、多分パニックになりすぎて逆にってやつだな。
「じゃあ、倉月さんは…火をま、守ってて……僕が、な、何か動物でも捕まえて、くるから。」
「うん。ゴメンね、咲野くん。」
。
。
。
いた！！
俺はその体を引っつかむ。

よっしゃぁぁぁ！晩飯ＧＥＴだぜ！！

その白い体から読み取ると、多分ウサギだろう。首根っこを掴んで宙ぶらりの状態。

よし…これで飯にありつ…ん？

ちょ、ちょっと待て…このウサギ何か角生えてるんですけど！？

い、痛てててて！

か、噛んでる！？超ガジガジしてる！

は、早く戻らなきゃ…食いちぎられる！？

その時だ。俺の耳に女性特有の高い悲鳴が聞こえたのは。

「な、何だ！？」

俺は駆け出していた。そうだ、悲鳴が聞こえたのは倉月さんのいる方向だ。

ハァハァ。

息を切らしながら森を突き進んで行く。

そして、火をつけた場所……

……緑色の人間？がいた。

俺は持っていたウサギ（角持ち）を取り落とす。緑色の人間？は六人いて、錆びた斧や、剣を持っている。みな一様に醜い顔をしている。

そして、そのうちの一人が、倉月さんを組み伏せているのが見えた。布の様なもので猿ぐつわをしているが、倉月さんの顔は恐怖に歪んでいる。

（な、何なんだよ、こいつら！？…人間じゃない…！？てか、怖ぇぇ！）

「んんむ！！」

倉月さんが呻き声を上げる。どうやら、体をまさぐられている様だ。制服とYシャツを脱がされ、上は下着だけの姿になっている。

「や、やめろ！！」

俺は動物を捕まえるために持っていた木の棒を振り上げて緑色の化物に立ち向かう。

力一杯振り下げた木の棒。確実に当たったと思った。

だが、緑色の化物は斧を頭上に掲げ、木の棒での打撃を防いでいた。斧の刃の部分で受け止められたからだ。木の棒は真ん中から折れてしまった。

「く、くそ！」

そのままその一匹に蹴りを放つ。だが、その蹴りはいとも容易く

足首を掴まれる事で防がれた。

そして、死角から到来する棍棒。
それは気づいた時には、もう俺の頭を力一杯ぶっ叩いていた。

「がは！」

視界の端に紅い血液が舞ったのが見えた。
気を失いそうになる俺の頭は続けて何度も到来する棍棒や剣や斧によって、気絶と覚醒を繰り返した。

剣は肩口を深く抉り、斧は脇腹にめり込む。棍棒は体全体をまんべんなく打ち付けられた。

化物の向こう側で泣き叫ぶ倉月さんの姿が見えた。涙が頬に伝い、とても悲痛な顔をしている。服などはほとんど脱がされ最早下着だけの状態だ。

倉月さんを組み伏せてる化物が、腰に巻いていた布を取り払ったのが見えた。
倉月さんの顔に目に見えて恐怖が宿る。

（くそ…体が動かねぇ…。）

意識すると鈍い痛みが体全体を支配し、ズキズキと脳を焼く。

「いやぁ。助け…て…。」

倉月さんのＳＯＳ。

（くそ！！動け！！動けよ！助けるんだよ！いう事を聞けよ！）

残りの化物達も、もう俺が瀕死だという事が分かったのか、倉月さんの揃って方へと歩いて行く。

（ちくしょう…なんで俺は！！）

『助けてーか？』

（助けたいに決まってるだろ…！！）

『覚悟はあんのか？理由は？』

（んなもん必要ねーよ！！助けたいから助ける…それだけだ…！）

『……ハ、ハ、ハハハ。契約は完了だ。ここからは…オレの出番だ…。』

脳に響いていた声が、途端に大きくなったような気がした。

その途端に俺の体に湧き上がる力。傷がどんどんと治癒して行く。

それと同時に、左手に感じる鈍い痛み。

そこにあった、『姫』という文字は、炎を灯した様にパチパチと音を立てて姿を変える。

二秒後。その手にあったのは……

『鬼』という文字だった。

「ハハハハ…。」

一斉に俺の方を振り向く、醜い顔ぶれと整った倉月の顔。

「お前ら……」

立ち上がった俺を再び倒そうと、数匹の化物が到来する。

「死んでみるか…？」

俺はそれだけいうと、走り出す。

右から斧。左から剣が来るが俺は避けて、右の斧持ちの顔面に貫手を打ち込む。

右の眼球を真ん中から真っ二つにして、そのまま、後頭部を突き破る。

左から来る剣を、貫いた化物バリアで防ぐ。

「キシャアアア！！」

甲高い叫び声をあげて生き絶えた化物。その化物が倒れる時、手に持っていた斧をぶん取る。

剣持ちの頭頂部へと思い切り叩きつけると、剣持ちは脳みそを撒き散らしながら、地面に顔面を打ち付けるように倒れる。

「フン…クズが…すぐに肉塊に変えてやるよ……」

「クキシャァァ！」

残りは四匹。まず前方の二匹のうちの一匹に斧をぶん投げる。見事に顔面へと飛んで行き、顔を綺麗に二等分した。

仲間が殺された事で隣の一匹がそちらに目を向けた。その隙を逃さずその頭を掴むと地面に叩きつける。

「おいおい…本来で来いよ…？」

叩きつけた化物は吐血しながら立とうとするが、俺がその背中に座る事で、立つ事ができない。それでも尚暴れる化物の両目を手を鍵型にしてくり抜く。

「ゴギャァァァァ！！」

悲鳴がうるさかった。とりあえず、首の骨を片腕で折る。

残りは二匹。

「血が足りないな…」

尻の下にある化物の首を手刀で貫くと、血が滴る体をそのまま持ち上げる。頭と胴を掴んで引っ張るといとも容易くブチブチと音を立てて、分裂した。

その手に付着した血液を舐める。

「お前ら…不味いんだよ…」

残りの二匹が武器を振りかぶって攻撃して来る。

まず一匹の剣を足で弾いて、もう一方の奴の剣は刃を掴んで顔面に拳を叩き込む。手放した剣を取って、腹に突き刺す。

瞬く間に自分以外いなくなった事を知ると、化物は慌てて引き返そうとする。

その背中に、俺は思い切り剣を投擲した。

。

。

。

血に染まった草原で、二人の男女は見つめあって立っていた。

「咲野くん…？」

その一方が男に尋ねる。

「あぁ？誰だそれ？”オレ”の名前は『鬼葉』だ。咲野なんかじゃねぇ。」

「え？」

「…ああ？お前が言ってるのはこの”入れ物”の事か？…ふ。まあいい。もう時間だ。”俺”に言っとけ。次はもっと楽しませろってな。」

そう言って咲野くんは、倒れこむ。
火に、水をかけた様な音がなり、左手の文字が変わった。
あれは誰だったのだろうか？喋る時に見えた、異常に長い犬歯を
不思議に思いながら、気絶した咲野くんを膝枕で看病していた。

第四話　人発見！！

眠い……。気持ちがいい。肌に伝わる爽やかな風が、俺の体全体を包み込んでいる様だ。

……ってこれ前回の走り出しと一緒じゃねーか！！

ん？ちょっと待てよ……確か前回は……そうだ！！このまま倉月さんの胸を揉んでしまったんだ！

よし、俺動くなよ！？いや、冗談抜きで！！

「咲野くん？」

もしや…もう揉んでるのか！？いやいや、さすがに二回目は言い逃れ出来ねーよ！？だって常習犯じゃん！！前科ありじゃん！！早速お縄につくよ！？

ちょっと待て！まだ、揉んだとは限らない！！そうだ！確かめよう！薄目を開けて見てみよう！！そうしよう！！

そうして俺は極僅かに目を開けて様子を伺った訳だが……

「咲野くん！？目が覚めたの！？」

なんかすんげえ目が合った！！しかもなんかわかんないけど絶賛膝枕中です！！

やべ、嬉しい……ってそうじゃねーよ！！

そうだ！状況を整理しよう！！ＯＫ？

えー…と確かあれだよ！！緑色のなんかすんげえＲＰＧに出てきそうなキモい人間がいたんだよ！！

それで…倉月さんが…そいつらに……

「あ！！」

俺は飛び起きる。

「何どうしたの？」

「倉月さん！体は！？どこも異常はない！？」

「うん…。」

倉月さんは苦しそうだが、それでも嬉しそうに笑った。

「よかった…」

何だか涙が出てきた。

「ありがとう。咲野くん。」

今度は自然な笑みを見してくれた。

やっぱりこの人にはこの笑顔だな。

あれ？でも俺何かボロボロにされたよな…

？

体に傷がない！なんてこった！これがＮ○ＳＡの技術か！？

ん？そういえばまだ、明け方か…。【主人公は案外切り替え早いです。】

もう少ししたら、また探索してみるか…人がいればいいんだけど…

「じゃあ倉月さん。もう少ししたら森を探索してみよう。」

あれ？なんか違和感…。対人恐怖症が…作用してない！？

おっしゃあ！！なんか知らんけどありがとう！！これで自由に恋愛ができるぜ！！

「うん。」

俺の提案に少し頷くと倉月さんはトコトコと俺の横に来た。

ウォ！？こんな超絶美顔が…俺のすぐ横にあるなんて…。

そうして、倉月さんは俺の肩に頭を乗せた。

「咲野くん。」

「何でしょう？」

「あたしがまた、危なくなったら…助けてくれるの？」

こちらをじーっと見て質問の答えを待っている。

それにしてもまたって何だ？そこはよくわからんが本筋は理解できた。

「当たり前だよ。絶対に助ける。」

俺がそう言うと、倉月さんは、すこし微笑み言った。

「あたし誤解してた。悪いけどなんかいつもオドオドしてて、頼りないなって思ってたの。でも勘違いだったね。……本当にありがと、咲野くん。」

…しみるぜ……。

。

。

。

「ハァハァ」

いや、息が荒いですが、決してその様な嬉しい展開ではありません。

単純に疲れているだけです。ハイ。

それより、この森……広すぎだろぉぉ！！

少しぐらい人出ろよ！もう昼なんですけど！？超絶腹減りました！！

「誰もいないね？」

くっ！！心底疲れた様な顔をする倉月さんを見てられない！！
頼みます！！一生に一度の願い事です！！どうか！どうか、人を！！
「ん？」
何やらザワザワといった声が聞こえる…。
あれ？これ話し声じゃん！？もしかして人か！？人なのか！？
そう思い、樹の影から様子を伺う。
そこには鎧やらを完全武装した兵士の様な人たちが五人いた。ヘルムをみんなつけており性別はわからない。剣も差しており、お前らいつの時代の何人だ！？って突っ込みたくなったが何とか我慢できた。
コアなコスプレイヤーかもしれないし。
「団長～もういいじゃないですか～。ゴブリンなんて討伐しようがしまいが同じですよ。」
部下なのだろうか、先頭を行く人物をさとしている。
「ゴブリンだからと侮っている奴が一番先に死ぬのさ。」
低めの、ハスキーな声が耳に届いた。言われた部下は少しため息をつき、また沈黙した。

何だろう。凄い嫌な予感が……言ったっけ？俺の嫌な予感は大抵当たる事？

ここまで考えたところで、耳にパキッ、という音が届いた。

倉月さんが枝を踏んで折ったらしい。

「誰だ！？」

ハスキーボーイが血相変えてこちらに体を向ける。まあ、鎧着てるから、血相なんて見えないんだけど。

ハスキーボーイを合わせた五人が一斉に剣を抜いたのを見て、結局観念する。

「貴様ら誰だ！？どうしてそこにいた！？」

凄い耳に響く怒声だ。倉月さんが怖がってるからマジでやめて欲しい。

「僕達は怪しい人間ではありません。ただ、ここを探索していただけです。」

「探索だと？ふざけるな！この森は魔所認定地域だぞ！？鎧もつけずに入れる訳ないだろう！？」

「いや……僕らは…　その……記憶喪失なんです！！」

咄嗟にそんな言葉が出てきた。いや、でも実際にここにいる謎は分からないんだから、案外アリかも。

「記憶喪失？……じゃあ最後に聞かせてもらう。君達は人間か？」

何を当たり前の事を。この人は俺がイ〇ティにでも見えてるのか？

「人間に決まってるじゃないですか。」

そう言うと、先頭のハスキーボーイは少し俺たちを見つめた後、言った。

「嘘はついてない様だ。剣を納めろ。……それにしても君達みたいな少年少女がなぜ？」

そう聞かれるとどうしようもない。何たってその”ここにいる理由”が俺たちにも分からないのだから。

「すいません……僕達にも何がなんだか……」

その俺達の落胆ようを感じたのか、ハスキーが気を利かせてくれる。

「……そうか…済まないな…よし！私がとりあえず街まで案内しよう。探索してたという事はここがど何処だか分からないのだろう？」

「は？」「え？」

先が俺で後が連れ達だ。

「ちょっと待ってください！！団長、ゴブリン討伐はどうしたんですか！？」

今まで静かだった部下の一人が喚く。こいつは部下Bとしておこう。

それに対して、団長兼ハスキーは考える素振りも見せずに言った。

「市民を助けるのに、戦うか、守るかは同じ事だ。どっちにしろ私はこの子達の面倒を見る。それが騎士たる物の職務だ。」

部下に何も言わせない、飄々とした態度で言い放つ。

「ほら、こっちに来なさい。」

ハスキーが優しく言ってくる。

それでも部下Bは納得出来ないのか、少し押し殺した声色で言う。

「私は反対です……。まず、その者達の素性が知れません……。」

「ほう？貴様は私の”眼”を侮辱すると言うのか？」

ハスキーが人差し指で目尻当たりを指す。

「……反対はしましたからね…」

部下Bはそう言うと、こちらを見てくる。鎧で顔を隠してるが、俺にはわかった。おもっくそ睨みつけてきてる。殺気がビンビン伝わってくる（俺だけにね？）

そして、俺たちが少し戸惑いながらもハスキーの前に行くと、ハ

スキーはゆっくりとした動作で、鎧を脱いだ。

「改めて名乗らせていただく。ミレイド騎士団の団長。リファエル・クライドだ。エルと呼ばれている。よろしく。」

鎧を脱いだ後にあった顔は、とても騎士団長と言える様な屈強な顔ではなかった。纏めていた腰当たりまで伸びる、青い澄んだ長髪に、キリッとした射抜くようなグリーンの眼。真っ白な肌に、桜色の綺麗な唇。

直感した。クソ美人じゃねーかよっっ！！

何だこの人！？人か！？人なのか！？いや、冗談抜きでな！？こんな綺麗な人が存在していいのかよ！？正に完璧な顔だ……。認めよう。俺の美人ランキング、倉月さんと並んで堂々の一位だ…。

「よろしくお願いします。」

手も綺麗だな…。真っ白で…まるで宝石だ…ん？竹刀ダコがある…。結構使ってるな…剣術やってんのかな？

俺はそのまま、その白魚のような手をずっと触っていた。すべすべしててとても気持ちがいい。

「…済まないが…そろそろ離してくれないかな…？」

え？

倉月さんが俺とエルさんの間に割って入ってくる。俺を押すと、エルさんの手を取る。

なぜか倉月さんにムスっとした顔で見られた。

「それでは街に戻ろう。」

その言葉に俺と倉月さんは力強く返事した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5538z/

使えない一人称は異世界にて

2011年12月28日03時46分発行